

キリスト教徒アラブ・ナショナリストの先進性と限界 ——第4回パレスチナ・アラブ会議を例に

文・写真
菅瀬晶子

共同研究 ● パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点 (2011-2014)

2011年度からはじまった本共同研究も、本年度で最終年度を迎える。今年度の終わりに成果報告として、英国委任統治時代（以下、委任統治時代）再考というテーマでワークショップ開催と論文集編さん予定している。そこでは歴史学と人類学、社会学の視点から、委任統治時代におけるアラブ人と、ヨーロッパからシオニズムを掲げて入植したユダヤ人の接点を再考察する。筆者はこれまで、イスラエル国内のアラブ人キリスト教徒のアイデンティティの様態や、彼らの文化のなかでキリスト教徒のアイデンティティがいかに表象されてきたかという調査を続けてきた。そのうえで、委任統治時代初期のキリスト教徒が、アラブ／パレスチナ・ナショナリズムにいかに関与してきたのか、とくに注目されるのが、委任統治時代初期に開催された第4回パレスチナ・アラブ会議と、キリスト教徒たちの動きである。会議関係者のなかでパレスチナにおけるアラブ／パレスチナ・ナショナリズムの先駆者であるナジブ・ナッサーと、当時のメルキト派カトリックのガリラヤ大司教、グレゴリオス・ハッジャールは、ともにハイファを拠点として活動していた。彼らの動きには、現在に至るまでこの街の商業を主導し、エルサレムのムスリムの名望家たちに無視できない影響力を有してきた、キリスト教徒たちの政治観が色濃く反映されている。

歴史的にパレスチナと呼ばれてきた地域（以下、歴史的パレスチナ）は、現在イスラエル領となっているガリラヤ地方などを含めて、キリスト教徒人口が多い地域である。なかでもガリラヤ地方の中心地ハイファは、18世紀以来キリスト教徒が主導権を握ってきた。歴史的パレスチナを含むシャーム地方（シリアを中心とした東地中海アラビア語圏）では、人の移動が盛んで、ことにキリスト教徒は移動が多い。なかでも東方正教から分離したトルキト派カトリックは、レバノンやシリアから東方正教との軋轢を避けて、ガリラヤ地方に多く流入した。アラブの独立国家樹立をめざすアラブ／パレスチナ・ナショナリズムと、その前身であるアラビア語復興運動の旗手もまた、キリスト教徒であった。

筆者が文献調査と聞き取り調査を並行して進めてゆく過程で浮かび上がってきたのは、パレスチナにおけるアラブ・ナショナリズムの主導権をめぐる、ムスリムとキリスト教徒の暗闘である。結果的にキリスト教徒はこの戦いに敗れるのだが、その転換点となったのが、委任統治初期の1921年に各地のパレスチナ人の代表が開催した、第4回パレスチナ・アラブ会議であった。

第4回パレスチナ・アラブ会議とその内容

パレスチナ・アラブ会議は委任統治時代の前半期、歴史的パレスチナの主たる都市の代表が定期的に開催していた会議である。第一次世界大戦後、パレスチナを支配していたオスマン帝国が解体され、サイクス・ピコ協定とバルフォア宣言に基づき、パレスチナは英国の委任統治領となった。「パレス



「ハッジャール大司教通り」の標識。有志により、アラブ人が多く住む通りの名前に彼の名がつけられた（2014年1月8日、ハイファ）。

チナにユダヤ人の民族的郷土を与える」としたバルフォア宣言を拒否し、英国の支配に対抗することが、会議の理念である。1910年代末から20年代前半、パレスチナのアラブ・ナショナリストたちは英国の統治を受け容れるか否かで意見が大きく分かれ、反英・反シオニズム傾向はキリスト教徒のほうがむしろ強く、親英派はムスリムにもキリスト教徒にも一定数存在した。また、各地方の中心都市には宗教・宗派ごとの会議が存在し、その意見をまとめて協議する場がパレスチナ・アラブ会議であった。

1921年6月25日、エルサレムで開催された第4回会議では、バルフォア宣言の拒絶やユダヤ人入植の停止などパレスチナ側の要望を、英国に渡航して伝える代表団の選定が行なわれた。会議の終盤まで議長をつとめたムーサー・カーズィム・アル・フセイニーら6名が選出され、うちキリスト教徒が2名であった。キリスト教徒のうち1名はハイファ在住のフアード・サアドで、同じくハイファ在住のナジブ・ナッサー同様キリスト教徒の発言権拡大をめざすアラブ・ナショナリストであった。

ところが、サアドは代表団を辞退してしまった。加えてこの第4回会議を境に、ハイファのキリスト教徒アラブ・ナショナリストたちの発言力は、パレスチナ・アラブ会議で急速に弱まっていく。なぜそのような事態に至ったのか、サアドの後援者であるメルキト派カトリックのガリラヤ大司教、グレゴリオス・ハッジャールの活動をとおしてみたい。

グレゴリオス・ハッジャール

1875年、レバノン南部のラーメ村に生まれたハッジャールは、メルキト派の学究の中心である救世主修道院で学び、1901年に26歳という異例の若さでメルキト派のガリラヤ大

司教に選出された。その後約 40 年間にわたる任期中、彼は教区内の聖堂と教育機関の整備に力を注ぎ、現在もなお、その功績は生き続けている。

ハッジアルは政治にも高い関心を持ち、すでに第一次世界大戦中から、熱烈なアラブ・ナショナリストとして知られていた。同じころ、やはりハイファを拠点に活動していたキリスト教徒のアラブ・ナショナリストに、ナジーブ・ナッサールがいる。彼はアラビア語でシオニズムに警鐘を鳴らした最初の人物である。バルフォア宣言を受けて急増するシオニストの入植が歴史的パレスチナの将来におよぼす影響を危惧しながらも、ナッサールはプロテスタント信徒としての立場から親英的であった。

いっぽうハッジアルは対照的に、首尾一貫して反英・反シオニズム、親仏を貫いた。この姿勢は、彼が親仏のメルキト派カトリックの首長であることに起因している。ハイファの最大集団であるメルキト派の首長として、英国の政策に批判的な彼が代表団に参加することは、パレスチナのキリスト教徒として直接英国政府に働きかけることを意味する。ところが結果的に彼は候補から外れ、

代わりに腹心のサアドが選出されるが、サアドは辞退した。彼が指導者と仰ぐハッジアルが候補に選出されなかったことと、エルサレムのムスリム名望家を優先する人選がなされたことへの抗議表明が、その理由ではないかと考えられる。

第 4 回会議以降、ハッジアルとサアドはパレスチナ・アラブ会議からはほぼ手を退いたが、ハイファのキリスト教徒に対するハッジアルの影響力は絶大であった。聖堂と教育機関の増設のほか、腹心のアラブ・ナショナリストたちとともにキリスト教徒の若者たちの意識向上につとめ、ほかの都市のムスリムの代表者とも活発に交流した。第一次大戦時の「アラブの反乱」の指導者、ヒジャーズ王フサインとも会見し、パレスチナのアラブ人の代弁者としてヨーロッパ外遊もおこない、やがて「アラブの大司教」と呼ばれるまでになる。彼の名をもっとも高めたのは、1936～39年に起こった委任統治に対する反乱（「アラブの革命」と呼ばれる）に際して民衆を鼓舞した声明である。そのなかで彼は、ユダヤよりも古い、数千年に渡ってこの地に根付いてきたパレスチナ人、アラブ人としての誇りを忘れずに団結せよと、人びとに訴えた（Mansour 2013：264-265）。それは大シリアの一部としてアラブ国家樹立を願う従来のアラブ・ナショナリズムから脱却

し、パレスチナ人としての自主独立をめざすパレスチナ・ナショナリズムへと昇華させた演説として名高い。パレスチナ出身ではない彼がこの演説をおこなったところに、ガリラヤ地方の人びとは胸を打たれた。40 年代の混乱のなかで不慮の死を遂げた彼は、近年パレスチナ・ナショナリストとして、再評価されつつある（Mansour 2013）。

ハッジアルとナッサールには、三つの共通点がある。まずともにパレスチナではなくレバノン中・南部の出身であるという点。ことにナッサールの出身地であるレバノン中部のシューフ地方は、アラブ・ナショナリズムの前身であるアラビア語復興運動の担い手たちの出身地であり、教育水準の高いキリスト教徒の家庭・社会環境が、アラブ人の自主独立

の重要性にいち早く気付く先見性を養ったといえる。二点目は、アラブ・ナショナリストとしてハイファ、およびガリラヤ地方に根ざして活動したという点であるが、これは三点目の共通点とも関係がある。三点目は、代々ムハンマド直系の子孫としてエルサレムで権勢をふるってきたムスリムの名望家の権威と、多数派としてのムスリムの発言力に結果的には敗れ、アラブ／パレスチナ・ナ

ショナリズムの指導者としての立場を明け渡さざるをえなかったという点である。ただし、少数派であったからこそ、比較的キリスト教徒の多いハイファとガリラヤ地方に根ざし、粘り強く活動を続けることができたのだともいえる。

【参考文献】

Mansour, Johnny 2013. *Ru'ya Mu'asira li-hayāt wa 'A'māl al-Matrān Grigūryūs Hajjār*. Haifa: AL-HAKEEM.

すがせ あきこ

国立民族学博物館研究戦略センター助教。専門は文化人類学・中東地域研究。イスラエルのアラブ人キリスト教徒をおもな調査対象とし、現在はムスリムとキリスト教徒、ユダヤ教徒が共有する聖者崇拝や、キリスト教徒の食文化について調査を進めている。著書に『イスラエルのアラブ人キリスト教徒』（溪水社 2009 年）、『新月の夜も十字架は輝く—中東のキリスト教徒』（山川出版社 2010 年）などがある。



クリスマス期におこなわれた共生を祝うハイファ市の祭でパレードする教会の鼓笛隊（2013 年 12 月 28 日）。